

左右田喜一郎における「文化主義の論理」と新カント派社会主義

大木 康充

はじめに——左右田研究という「課題」

本研究は、拙稿「近代日本における『文化主義』の登場とその展開——桑木厳翼・金子筑水・土田杏村」（萩原稔・伊藤信哉編『近代日本の対外認識 II』所収、彩流社、2017年）において、「二 文化主義の創案者桑木厳翼」に続く第三節として執筆する予定のものであった。だが、紙幅の都合と、「対外認識」を主題とする関係上、現実の国際情勢への積極的関心を殆ど示さなかった左右田喜一郎は割愛せざるを得なかった¹。しかしながら、大正期の文化主義思想を検討する上で、桑木厳翼と並び左右田の存在は重要な地位を占めるものであり、いずれ立ち入って論じたいと強く念じてきた。こうして、いわば「課題」として残されたかたちの左右田研究であったが、未発表の草稿に大幅な加筆・修正を加えることで独立した論文としての体裁を整え、ここによりやく公表の機会を得た次第である。

第一節 「文化主義」と「天才」の概念

船山信一は『日本の観念論者』（英宝社、1956年）において、「経済哲学」の樹立、「諸文化価値」平等の主張、「西田哲学」批判、「文化主義の立場」による「社会思想」との対決という以上四点をもって、近代日本哲学における左右田哲学の意義とみなしたが²、哲学に限らず、広く近代日本の社会科学の発展に貢献した経済学者・哲学者の左右田喜一郎は、1881年に横浜で生まれた³。父の金作は1895年に左右田銀行を興し、のちに喜一郎がこれを継いだ。昭和期の金融恐慌のあおりを受けて経営破綻に陥った。その対応に追われた左右田は、心労もあって1927年に46才の若さで亡くなっている。

若き日の左右田が経済学を学んだのは、東京高等商業学校専攻部（現在の一橋大学）においてであり、そこで福田徳三、佐野善作らの指導を受けた。卒業後、1904年に渡英しケンブリッジ大学で学び、次いでドイツのフライブルク大学に移り、経済学ではK・J・フックス、哲学ではH・リッケルトに師事した。

1909年、テュービンゲン大学に提出した学位論文 *Geld und Wert*（『貨幣と価

値』が認められ、Doktor der Staatswissenschaften（国家学博士）の学位を得た。そして、1911年には*Die logische Natur der Wirtschaftsgesetze*（『経済法則の論理的性質』）を発表しており、後年、この二著の業績が評価され帝国学士院賞を受賞した⁴。このような学問遍歴からも分かるとおり、ヨーロッパ留学での左右田の主な問題意識は、経済と哲学の関係如何、すなわち「経済哲学」の建設に向けられていたといえよう。

約9年にわたる長期の留学生生活を終え1913年に帰国した左右田は、これまでの「経済哲学」に関する研究⁵を足掛かりに、新境地の開拓に挑んでいった。たとえば、「経済学認識論の若干問題」（『経済論叢』1915年9～10月）では、I・カントの批判主義哲学に依拠しつつ経済学の学問領域の確定を試みており、「一個の文化生活として解せられたる人類の歴史生活」が「貨幣概念」Geldbegriffにより関連づけられることで認識される諸領域をもって経済学の対象と定義した⁶。ここで留意すべきは、左右田の関心が「貨幣概念」などの「経済的文化価値」⁷にとどまらず、政治や法律、社会、文芸、宗教など、あらゆる人間活動を包容する「一般的文化価値」⁸の問題へと拡がりを見せた点である⁹。

講演『「文化主義」の論理』（『横浜貿易新報』1919年1月23～26日）で左右田は、「文化価値」Kulturwertの実現を阻害するような「官僚主義、保守主義、軍国主義を排して民主主義、進歩主義、自由主義に与する」¹⁰思想上の立場として、「文化主義」を標榜した。その内容とは、「凡ゆる人格が文化価値実現の過程に於て、夫々特殊の固有の意義を保持するを得、其の意義に於て何れかの文化所産の創造に参与するの事実を通じて、各個人々格の絶対的自由の主張を実現し得る事を求むるものであ」¹¹り、この意味において「文化主義は人格主義である」¹²と述べている。この点、「文化主義」創案者であり、「軍国主義」や「専制主義」への対抗思想として文化主義を唱道した哲学者桑木巖翼との思想的親和性を認めることができるだろう¹³。

左右田は、ドイツ留学中に師事したリッケルトの文化概念を基礎とし、「自然」に対立する概念として「文化」を位置づけた。その文化の中でも普遍的価値を有する「文化価値」については、「吾等が有する人文史上の諸価値を純化し一方的高昇の過程を極致に導きたる時、其の極限に立つて吾等が人文史上の凡ゆる努力に対して其の目標となり得るもの」¹⁴と説明している。左右田は、文化を「純

化」せしめ「一方的高昇」へと導く存在として、「天才超人」¹⁵の概念を示し、この「天才超人」を儀表として一般民衆が「文化価値」の実現に参画することを期待した。思想的に見れば、「天才超人」の指導が前提となるが）「文化価値」の担い手として一般民衆の人格的個性を尊重する点で、左右田の文化主義は、かれ自身がいうように「ヒューマニズムス」¹⁶ないし「人格主義」¹⁷としての特性を備えていた。

左右田は、大正期のデモクラシーとの関わりで、「天才」の意義を次のように強調した。すなわち、「高きを低めて、常に而して只管に、平準につかしめんとする事のみを其の一途の目的とする意味」¹⁸での「悪平等主義」¹⁹へとデモクラシーを転落させないためにも、一般民衆の教養や文化をより高次の水準へと引き上げる指導者、つまりは「天才」の果たすべき社会的役割が重要であると主張した。かれの「天才主義」は民主主義社会におけるエリートないしリーダーシップの問題を喚起したものといえるが、後で触れるように、観念論的な議論にとどまり現実における権力や支配の問題にまで踏み込んでいけなかったのは、左右田の思想的「限界」を示すものであろう²⁰。

さて、こうして強き「個」の代表選手たる「天才」の概念を掲げた左右田は、その固有の目的として「創造者価値」（「余に造語を許せ——"Schöpferwert"」²¹）を配した。ただし、「天才」といえども「人類の一員」²²である以上、時代的・社会的制約を免れるものではなく、社会の目的である「文化価値」から完全に切り離された存在ではないと論じている。それでも左右田は、「天才」の「創造者価値」と、社会の「文化価値」とを、基本的には対立関係として把握した。この点、「吾々人類の全部によつて全く諒解を得能はざりし幾多の天才が受け忍んだ凄愴たる歴史は此の一人の天才を抱擁する能はざる社会内に妥当なる文化価値と背反対峙の関係にあることを示す」²³と左右田は弁じ、後述のように、社会に受け容れられず排斥され、歴史の狭間に消え去った「幾多の天才」の存在を確認している。

左右田が、「天才」固有の「創造者価値」を提起した背景には、近代日本における「個人主義の確立」という思想課題があった。それは、見方を変えれば「個人と社会」の関係をめぐる問題ともいえるが、これに関連する左右田の論文の中で、もっとも注目すべきは「文化哲学より観たる社会主義の協同体倫理」（横浜

社会問題研究所編『社会問題研究叢書第二編 新カント派の社会主義観』、1925年2月。のち左右田喜一郎『左右田喜一郎論文集 第二巻 文化価値と極限概念』所収、岩波書店、1972年）である。

なお、同論文を主な題材とし、左右田の『文化主義』の論理と、そこから生まれた『社会』観²⁴を立ち入って考究した飯田泰三『大正知識人の思想風景——「自我」と「社会」の発見とそのゆくえ』が2017年に公開された。同書では、「個人意識における内面的主体化」と「社会認識における実証的対象化」という分析枠組み²⁵から、左右田の文化主義と社会哲学とに検討が加えられ、そこに見られる「徹底した認識論的個人主義」や「合理主義」の立場が評価される一方²⁶、その問題意識が「個人対社会」の論理的分析にとどまり、社会における「支配」や「強制力」の「契機」への関心が殆ど見られないことから、「個→普遍、私→公、への具体的な形成の論理」²⁷は生じ得なかったと、その限界性が指摘されている。

本稿では、飯田氏の研究とは別に、左右田における「文化主義の論理」と「協同体社会」論とを接合する主要な要素として、前述した「天才」の概念と個人主義、そして新カント派「社会主義」の思想的関係に焦点を当てた。「天才主義」を背景とし、徹底した「個人主義」の立場をとる左右田が、一見、それと思想的に相反するような——たとえ「新カント派」を冠するものであったとしても——「社会主義」を、批判的立場からとはいえ一応は評価し、その一部を取り入れたのはなぜか。この問題については、従来の研究ではあまり深く掘り下げられてこなかったといえるが、左右田の文化主義の主要な思想課題である「個の確立」が行き過ぎた場合の制御装置として、新カント派社会主義が重要な役割を担っているのではないか。本稿は、このような仮説に基づきながら、左右田の文化主義思想に新たな解釈を加えようとするものである。

第二節 「個人と社会」の関係をめぐって

「文化哲学より観たる社会主義の協同体倫理」の劈頭で左右田が明示したのは、自身の哲学的立脚点と、その問題関心の所在である。すなわち、左右田が依拠する新カント派哲学の源流は、いうまでもなく18世紀の哲学者カントにあり、同時代における思想上の課題は「『頭上にあつては星空、身内にあつては道德律』

(Der bestimmte Himmel über mir, und moralische Gesetz in mir)」、言い換えれば「自然の大」と「個人の尊厳」がその主たる内容を占めていた²⁸。それがカント亡き後、19世紀から20世紀にかけて、「自然」と「個人」の中間的領域として「社会」が発見されるに至ったと左右田はいう。かれは、この「個人と社会」の関係——『個人と社会』は今や万人を通じて一個の sphinx と曰はざるを得ない²⁹——を、カント以後の哲学者における重要な研究課題とみなしたのである。

「社会の発見」に関していえば、左右田の東京高等商業学校時代の師である福田徳三が『社会政策と階級闘争』(1922年)で、「国家」と「個人」のいずれにも属さない「異例的現象」と説明しているが、「国家」と「社会」の関係を対立的には捉えなかつた³⁰。この点、左右田の場合は近世ヨーロッパの哲学的・思想的展開を背景に、「国家」と「個人」ではなく、「自然」と「個人」の中間的領域として「社会」を位置づけている。このような社会観から、「国家」をめぐる問題への関心が生じ得なかつたのは当然であつたかも知れない。

このうち個人と社会の関係について、左右田は、まずオーソドックスな二つの見方を示した。一方は各個人の合意に基づき社会が成立するという社会契約説に見られる原子論的社会観、他方は社会や国家なくして個人は成立し得ず、社会や国家の存立に個人の意義のすべてが包摂されるという有機体論的社会観である。左右田は両説について、「一は個人の尊厳の爲めに凡てを犠牲に供さんと欲し、他は社会の爲めには個人の存在をも無視し去らんとする」³¹極端な見解であるとし、個人と社会の対立関係を越えた第三説として、ドイツ新カント派における社会論に着目した。それは、マールブルク学派を代表する哲学者P・ナトルプと、西南ドイツ学派の影響を受けた法哲学者G・ラートブルフの所論であつた。

はじめに左右田が検討を加えたのは、「個人と社会とを以て盾の両面の如し」³²と捉えるナトルプの社会論である。その主な特徴として、個人と社会の対立を明確に否定し、双方の相関性——「両者は其の全部を挙げて相互に倚属しつゝある」³³——を強調した点を挙げている。

たとえば、『社会的教育学』(Sozialpädagogik, 1899)でナトルプは、「社会は個人と等しく発展するものであり、この発展は結局個人の発展と同じ普遍的法則に従う他ない」³⁴と主張したが、こうした「個人即社会」の一元論的傾向を有するナトルプの社会観に左右田は不満を抱いた。ナトルプは、「個々の人間は物

理学者の原子に等しく本来只の抽象態に過ぎない」³⁵とし、社会から離脱した個人の存在を認めようとはしなかったが³⁶、これに対して左右田は、ナトルプのいうように、社会が「個人の学問上、芸術上、行為上の『創造』(Création)の意味の全部を果して覆ひ得るであらうか」³⁷と異議を唱えたのである。

社会や国家に回収されない強き「個」の代表として左右田が挙げたのは、歴史上における「天才」の存在、すなわち、コペルニクスよりはるか以前に「地動説」を提唱した古代ギリシャの天文学者アリストアルコスである。アリストアルコスに限らず、たとえ生前は社会的に評価されなくとも、後世、その業績が見直されるに至った「天才超人」の例を示しつつ、「社会に全部を覆はれ盡さざる個人を考ふることを余は不可能なりとは考へない」³⁸と確信を抱いた左右田は、「天才」をして「無限の発展可能性」die unendliche Entwicklungsmöglichkeit³⁹と評した。

なお、左右田が掲げた「天才超人」は、「天才」の自己発展的な目的と、社会の普遍的な文化価値との乖離を指摘した哲学者・社会学者G・ジンメルにおける「創造的天才」⁴⁰の概念を主な論拠としていたと思われる。

さて、以上のように左右田は、「天才超人」の概念を振りかざしながら、ナトルプの一元論的社会論の問題点を抉り出していった。ただし、ナトルプのいう「社会」Sozialが「協同体」Gemeinschaftを意味する点に左右田は注目し、ナトルプだけでなく、ラードブルフにおいても「協同体」を中心とする社会論が展開されていることから、「今や『社会』を Gesellschaft (association) と解せずして Gemeinschaft (community) と解せんとすることは思想上一個の転換を意味する」⁴¹と特別の関心を示したのである。

第三節 ラードブルフにおける「協同体倫理」

左右田は、ナトルプやラードブルフらドイツ新カント派の社会論において「協同体」への関心が高まりを見せた思想背景に、近世以降のヨーロッパ(とくにドイツ)で隆盛した「個人主義」の影響を指摘した。ヨーロッパでは、思想的に「個人主義の確立と其の徹底とに急なる為め」⁴²、社会そのものの解体すら危惧される事態に陥り、そのような行き過ぎた「個人主義」に修正を加える社会概念として、「協同体」が改めて評価されるようになったと左右田は説いている。

ただし、一般に「協同体」という場合、まずは社会への「個人の没入が考へら

るのみ」⁴³というような旧来の伝統的社會が想起されるであろう。左右田によれば、「社會」Gesellschaft では個人が第一義的価値を有し、たとえ「社會」が解体しても個人の存立自体に影響はないと考えられるのに対して、伝統的な「協同体」Gemeinschaft での第一義的価値は「協同体」そのものの存続におかれ、「協同体」が一旦崩壊する如きことがあれば其時には即ち個人人格の回復とならずして却つて個人の滅却に終る結果に陥る」⁴⁴ものとされる。

左右田は、ヨーロッパにおける社會の發達史を鳥瞰しつつ、「協同体」に関する考察を進めていった。すなわち、古の原始家族生活を出発点とし、次いで宗教の名のもとに個人の人格的独立性が抑圧された中世都市生活を経て、大都市が勃興し国民國家が形成された近世國民生活へと及んで「社會契約說」の登場を見たが、それは思想的に「個人主義」の萌芽を意味するものであったと左右田は述べている。そして、近代に至ると「個人主義」の抬頭を背景に、人格的に独立した主体として個人が認められ、その各個人が一定の共同目的のもとに結合した「社會」Gesellschaft が勢力を得るようになり、くわえて産業經濟の著しい發展とともに「株式會社時代」と称するも過言に非ざる時代を現出せしめつゝある」⁴⁵と現下の主要な社會形態を説明した。

しかし、「株式會社時代」においては、個人の独立性が重んじられる一方で、労働者と資本家の対立が激化し階級的分裂の危機が現実のものとなった結果、この分裂を抑制し階級的調和をもたらす新たな「協同体」⁴⁶の設計図、換言すれば「社會主義」が時代的に要請されることになった、というのが左右田の結論であった。

なお、ここでいう「社會主義」とは、K・H・マルクスのそれではなく⁴⁷、新カント派の「社會主義」を意味するものである。それは、「文化價值」を共通の目的＝「理想」とする「協同体社會」の建設を志向し、文化の創造に寄与する限りにおいて個人の人格的意義を承認する点で、旧来の「協同体」とは異なる特性を示していた。左右田は、この新カント派「社會主義」の代表的論者としてラードブルフを挙げ、かれの小著『社會主義の文化理論』（*Kulturlehre des Sozialismus*, 1922）で提示された三つの社會概念を検討している。

それは、第一に「個人の倫理的人格完成」を目標となす「個人的」individualistisch 社會⁴⁸、第二に個人を超越した「全体」Ganzes としての「國家」（の「名譽」）

に第一義的価値を認める「超個人的」überindividualistisch 社会⁴⁹、最後に各個人の相互作用の所産たる「文化」を理想に掲げる「超人格的」transpersonal 社会⁵⁰である。これを別の言葉で表現すれば、第一は個人主義・契約論的な社会、第二は全体主義・有機体論的な社会＝国家となるが、なかでも左右田が目にしたのは、第三説の「超人格的」社会、つまりラードブルフのいう「協同体社会」であった。

左右田によれば、ラードブルフの「協同体社会」とは、文化の創造に参画する過程で個人内面に醸成される「協同体倫理」Gemeinschaftsethik——「仲間づき合ひ」Kameradschaft・「協同の精神」Gemeinsinn・「労働の喜び」Arbeitsfreude⁵¹——を紐帯として形成される理想社会であり、ラードブルフはこの「協同体倫理」をもって新カント派の「社会主義」と呼称した。これについて左右田は、社会の分裂をもたらすような均衡を欠いた「個人主義」への対抗思想として、一応は評価したのである。

第四節 「創造者価値」と「文化価値」の「合一」という問題

それでは、なぜ一応の評価にとどまったのか。「個人と協同体社会との関係を系列員（Reihenglieder）と其の極限との関係に於て個人の全部をして其の独自の位地を保持せしめつゝ且つ全体としての文化の帰趣を仰ぎ見せしむるもの」⁵²と左右田が解釈するラードブルフの「協同体倫理」では、「協同体社会」の目標である文化の創造に関与する限りで個人の人格的意義が認められる。しかし、それでは「協同体社会」の目標に個人の意義のすべてが回収される、言い換えれば「協同体社会」の中に個人が完全に埋没することになり、左右田はこれを全面的に受け容れることができなかつたのである⁵³。

先述のとおり、左右田は、社会や国家でも覆いつくせない特別の意義を有する個人の代表的存在として、歴史上の「天才」を挙げた。そして、「天才」固有の目的である「創造者価値」と、社会全体の目的である「文化価値」との「合一」を、現実には殆ど実現不可能な「永久の課題」⁵⁴と規定した。これを左右田の「天才主義」の立場から見れば、「天才」の教導により民衆の文化的水準を引き上げ、社会全体の文化を「天才」の領域へ近づけることによって達成されるべきものであったといえよう。

なお、左右田が「天才」の「創造者価値」を措定したことに関して、左右田よ

りやや遅れて文化主義を唱えた思想家・哲学者の土田杏村は、「天才の領域が社会から区別せられたといふことは、此れを時代的に見れば、哲学は半分だけ民衆のものになつたけれどもなほ他の半分だけは民衆により了解せられ得ないものとして貴族的に取り残されたことを意味する」⁵⁵と論難し、左右田の文化主義思想におけるデモクラシーの不徹底を問題視した。杏村は、社会から超越した「天才」の存在を認めず、「各人は各人の能力の限りを發揮して其れで満足する。社会と個人との関係につき、われわれはさうしたものを理想として居るのである」⁵⁶と主張し、「文化価値」をもって個人と社会に共通の目標と位置づけたのである。

この点、左右田が「天才」の「創造者価値」を主張したのは、社会や国家に対する個人の人格的独立性を強調することが主な目的であった⁵⁷。その背景には、既述のとおり、「個人主義」の発達という点で、日本はヨーロッパより大きく後れを取っているという問題意識があった。ただ、すでに近世の段階で個人主義の萌芽を見たヨーロッパの思想状況と比較して、20世紀においてもなお、「未だ数千年の昔の協同体倫理の夢に覚めず、個人主義の確立さへ完全に通過せざる日本」⁵⁸で、「創造者価値」と「文化価値」の合一などという「永久の課題」を語ること自体、「遠き未来の夢を痴人の説くにも類するであらうか。嘆ずべきである。恥ずべきである」⁵⁹と諦めにも、悲哀にも似た感情を左右田は吐露している。

個人主義の隆盛により社会の解体すら懸念されるに至った近代ヨーロッパの思想状況を鑑み、時代情勢によっては、天才主義を基調とする自らの文化主義が、社会から乖離した個人主義へ傾斜していく危険性を左右田は自覚していたように見える。だからこそ、批判的にとはいえ、「個人即社会」の理念を包有するドイツの新カント派社会主義を一応は評価し、自らの文化主義においては、「天才」の高みへ社会全体を引き上げていく意味での「創造者価値」と「文化価値」の合一というかたちで取り込み、一方で個人主義の行き過ぎに対する制御装置としたのである。だが、大正期日本の思想状況から判断して、そうした思想的準備があまりに先走りすぎたものであったことを自嘲し、先のような悲嘆の言葉をもらしたのであろう⁶⁰。

第五節 桑木巖翼と左右田喜一郎

さて、以上のように左右田は、「社会の発見」に先立つ「個人主義の確立」をもって大正期の日本が「通過」すべき思想的な発展段階と規定した。「天才」の概念を前面に押し出すことで、社会や国家から超越した個人の人格的意義を強調したのである。この点において、左右田の文化主義は、確かに「人格主義的文化主義」と評すべき内容を含んでいた。

ところで、この文化主義という呼称について、左右田ははじめ「文化価値の実現に努むる主義」という意味で「文化価値主義」と名づけたものの、のちに「冗長の嫌ひあるを恐れて」文化主義に変更したと述べている⁶¹。しかし、左右田が『「文化主義」の論理』を発表するより前、1918年11月には桑木巖翼が「再び戦後の思想界に就て」で文化主義を唱道していた。これについて左右田は、「自己の初めて命名したる所と信じたものが既に他人而かも我が桑木博士の『創造』したものであるといふことを聞くに及んで、余は全く之を知らずして此の命名をなしたことに於て何等かの機会に於て之を我が学界に向つて告ぐることは余の学問上の義務なりと思ふに至り、且つ内に省みて自らの寡聞を深く恥ぢざるを得なかつた」⁶²と率直に語っている。

ともにドイツ新カント派哲学、とりわけリッケルトの価値哲学を基礎としつつも、桑木と左右田はそれぞれ異なる問題関心から偶然にも殆ど同時期に文化主義を提唱した。桑木は大戦前のドイツを反省材料として、軍国主義に対抗可能な力強い平和主義の確立を求め、大戦後世界の平和の実現とその維持を目的とする「文化国家」論を核心となす文化主義を唱えた⁶³。また、左右田は「経済哲学」の研究を通じて人間の歴史生活上における文化の多様な意義に着目し、文化の担い手である個人の人格的意義に力点をおく「人格主義的文化主義」を主張した。明治期以来の絶対的な「国家価値」に代わる普遍的価値として「文化価値」を提示し、これを大戦後の社会や国家の新たな理想と位置づける「文化主義の論理」を基礎づけたのが、桑木と左右田であった。

ところで、比較的平易な文体で文化主義を説き、文化の概念を民衆生活の中まで広めていった点で、社会的に一定の影響力⁶⁴を有していたと考えられる桑木と比して、左右田はどうだったのか。

左右田の場合、これまで引用してきた文章を一瞥すれば明らかのように、非常

に難解な文体と専門的な學術用語が駆使されており⁶⁵、かれの影響力は一般民衆よりも学界や学生層に対して大きかったといえる。たとえば、政治学者の蠟山政道は、「認識論的批判主義の立場を最も闡明に現わし、社会学界に大きな影響に与へたものは、経済学における左右田喜一郎の業績であつた」⁶⁶と指摘し、さらに「我国にリッケルトやジンメルやマックス・ウェーバー等の所説が多くの学徒に読まれるに至った因由は、一に左右田博士の影響であるといつても過言ではない」⁶⁷と述べており、左右田の学問的影響力を高く評価した。

最後に、左右田の業績で忘れてならないのは、志半ばで挫折を余儀なくされた社会的実践の方面である。たとえば、1918年に吉野作造と福田徳三を中心に結成された「黎明会」⁶⁸に初期メンバーとして加わり、講演会などを通じて啓蒙運動に携わったほか、1921年には横浜社会館⁶⁹の初代館長に就任し、横浜社会問題研究所を主宰するなどしている。このように左右田は、現実社会の諸問題に積極的関心を抱き、その解決に取り組もうとする意気込みを示した。しかし、家業の銀行経営が傾いたことから、左右田は社会活動に従事する余裕を失っていき、1927年に失意のままこの世を去った⁷⁰。それでも、文化主義思想とのつながりで見れば、かれの社会的方面での活動は、「天才」が担うべき社会的役割を自ら率先して果たそうとしたもの、といつてよいのではないだろうか。

おわりに——文化主義の思想的系譜

第二次世界大戦後の日本における新国家建設の理念であり、「自由」と「平和」を核心とする「文化国家」の概念は、たとえば、文化を庇護する上で要請される軍事力に積極的意義を認め、文化の「擁護者」たる国家の道徳的価値が高唱された第一次世界大戦前のヘーゲル国家哲学における「人文国家」ないし「文化国家」Kulturstaat⁷¹とは、明らかに異なる志向性を示すものである。

第一次世界大戦後の日本では、こうしたドイツ流「文化国家」の概念転換をはかろうとする思想動向が見られた。その中核をなしたのは、過剰なナショナリズムや自文化至上主義に対抗し、普遍主義的な「文化価値」の理想を掲げる桑木や左右田ら「文化主義者」にほかならなかつた⁷²。しかし、それが第二次世界大戦後の「文化国家」と、直接ないし間接に如何なる関係を有するのか。戦前・戦後の思想的な連続性にも関わる問題であるが、その総合的研究は今後の課題とし

て残されている。

さしあたり、この課題に取り組む前提として、桑木や左右田が確立した「文化主義の論理」のその後の展開、つまり文化主義の思想的系譜を辿っていく作業が必要となるだろう。こうした問題意識を基底として、これまで一貫して取り組んできたのは、左右田らの「文化主義の論理」を批判的に受け継ぎながら⁷³、これを社会や政治、外交など様々な方面に「適用」しようと試みた思想家を主題とする研究である。その思想家——土田杏村の文化主義思想に含まれる多様な発展可能性に関する研究の成果は、いずれ一冊の著作にまとめたいと考えている。

¹ 大木康充「近代日本における『文化主義』の登場とその展開——桑木巖翼・金子筑水・土田杏村、萩原稔・伊藤信哉編『近代日本の対外認識 II』所収、彩流社、2017年、113頁。

² 船山信一『日本の観念論者』英宝社、1956年。のち『船山信一著作集』第8巻所収、こぶし書房、1998年、195～196頁。これにくわえて船山は『大正哲学史研究』（法律文化社、1965年、164～165頁）で、大正期に受容されたH・ベルグソンの哲学に関する左右田の研究を論じている。

³ 社会科学における左右田の学問的業績については、とくに蠟山政道『日本における近代政治学の発達』（実業之日本社、1949年）を参照。

⁴ 岩井茂「左右田博士略伝」、左右田博士五十年忌記念会編『左右田哲学への回想』創文社、1975年、3～4頁。

⁵ 批判主義哲学の立場から構築された左右田の「経済哲学」の内容とその意義については、野村隈畔『現代の哲学及び哲学者』（京文社、1921年、170～201頁）に詳しい。

⁶ 左右田喜一郎『経済哲学の諸問題』岩波書店、1922年、103頁。

⁷ 同上、106頁。

⁸ 同上、同頁。

⁹ 「経済哲学」を基盤としつつ、「価値哲学」の建設へ進んでいった左右田の思想的営為をまとめたものとしては、今田竹千代「近代日本の哲学思潮（下）——大正・昭和時代」（桑木巖翼・金子馬治監修『文化哲学』所収、理想社出版部、1938年、348～349頁）がある。

¹⁰ 『黎明会講演集』第1輯、1919年3月。のち左右田喜一郎『左右田喜一郎論文集 第二巻 文化価値と極限概念』所収、岩波書店、1972年、48頁。

¹¹ 同上、60頁。

¹² 同上、同頁。

¹³ 桑木巖翼における文化主義の内容については、さしあたり大木前掲論文を参照。

¹⁴ 左右田『左右田喜一郎論文集 第二巻 文化価値と極限概念』、51頁。

¹⁵ 同上、120頁。

¹⁶ 同上、53頁。

¹⁷ 同上、61頁。

¹⁸ 左右田『左右田喜一郎論文集 第二巻 文化価値と極限概念』、41頁。

¹⁹ 同上、42頁。

²⁰ 左右田の「天才主義」的傾向に関して、たとえば、松本三之介『近代日本の知的状

況』(中央公論社、1974年、126～129頁)では、文明批評家田中王堂の「哲人主義」、桑木巖翼の「文化主義」などと同様に、大正期における「知的な貴族主義の風潮」につらなるものとして説明されている。

²¹ 左右田『左右田喜一郎論文集 第二巻 文化価値と極限概念』、120頁。

²² 同上、137頁。

²³ 同上、140頁。

²⁴ 飯田泰三『大正知識人の思想風景——「自我」と「社会」の発見とそのゆくえ』法政大学出版局、2017年、177頁。

²⁵ 同上、56頁。

²⁶ 同上、188頁。

²⁷ 同上、189頁。

²⁸ 左右田『左右田喜一郎論文集 第二巻 文化価値と極限概念』、417頁。

²⁹ 同上、418頁。

³⁰ 福田徳三『社会政策と階級闘争』大倉書店、1922年、17頁。

なお、社会問題(労働問題)の登場を契機とする福田の「社会の発見」について、それが国家をも包摂する広がりを持った「社会」、すなわち「市民社会」を意味するものと解釈する研究として、池田信『日本の協調主義の成立——社会政策思想史研究』(啓文社、1982年、156頁)がある。

³¹ 左右田『左右田喜一郎論文集 第二巻 文化価値と極限概念』、421頁。

³² 同上、422頁。

³³ 同上、424頁。

³⁴ Paul Natorp, *Sozialpädagogik*, 1899. 篠原陽二訳『社会的教育学』玉川大学出版部、1954年、126頁。

³⁵ 同上、114頁。

³⁶ 『社会理想主義』(*Sozialidealismus*, 1920)でナトルプは、個人と社会の関係を次のように述べている。すなわち、かれが唱えた「社会理想主義」*Sozial-Idealismus*とは、個人の人格的成長を助長せしめる社会機能として「教育」を重視し、大学や各種学校・文化団体・宗教団体など「教育」を中心とする諸団体により複合的・多面的に構成される「協同社会」*Sozietät*の実現を要求するものであった。そこでは、「教育」という機能によって一元的に個人の成長と社会の発展とが期されることになり、この意味で、両者の相即的關係が強調されているのである。篠原陽二訳『社会理想主義』明治図書出版、1962年、5頁。

³⁷ 左右田『左右田喜一郎論文集 第二巻 文化価値と極限概念』、425頁。

³⁸ 同上、同頁。

³⁹ 同上、426頁。

⁴⁰ Georg Simmel, *Philosophische Kultur*, Verlag von Gustav Kiepenheuer, 1911. 阿閉吉男訳『文化の哲学』三笠書房、1943年、27～28頁。

⁴¹ 左右田『左右田喜一郎論文集 第二巻 文化価値と極限概念』、431頁。

⁴² 同上、同頁。

⁴³ 同上、432頁。

⁴⁴ 同上、436頁。

⁴⁵ 同上、439頁。

⁴⁶ 同上、444頁。

⁴⁷ 「限られた一部の人生観を以つて全部に強みんとする官僚主義、軍閥主義を蛇蝎の如く忌み嫌ふ文化主義は、又民衆一般の仮面の下に仮令大多数なりとは云へ単に無特権階級を以て特権階級に代置せんと企つる社会民主主義を斥けざるを得ない」と左右田は説いており、「文化主義の論理」的帰結として、マルクス主義的な階級闘争を否定した。同上、58頁。

⁴⁸ 同上、456頁。

- 49 同上、456～457頁。
- 50 同上、同頁。
- 51 同上、459頁。
- 52 同上、466～467頁。
- 53 このような左右田の社会観に関して、飯田氏は、「一定限度において『個人の社会的没入』があるとともに、『依然として個人が其の尊厳を持して立つ』点で「ゲマインシャフト」（協同体）との違いを認めつつ、そこに「多元論的な社会理論の影響」（マッキーヴァー）を指摘した。さらに、多元論的立場から「諸文化価値」の間に上下の差を認めない左右田の「価値の体系」論に、『『市民社会』的な『デモクラシー』の哲学たる要素』を見出している。飯田前掲書、181～182頁。
- 54 左右田『左右田喜一郎論文集 第二巻 文化価値と極限概念』、470頁。
- 55 土田杏村『日本支那現代思想研究』第一書房、1926年、185頁。
- 56 同上、同頁。
- 57 左右田における「天才」の「創造者価値」について、飯田前掲書では、「人間存在の単独者性（キルケゴール）」（187頁）という視点から分析が加えられている。
- 58 左右田『左右田喜一郎論文集 第二巻 文化価値と極限概念』、472頁。
- 59 同上、同頁。
- 60 左右田の「創造者価値」を批判し、個人と社会の共通目的として「文化価値」のみを定位した土田杏村には、左右田のような思想的葛藤はあまり見られない。その一因として、飯田前掲書（203頁）で指摘されているとおり、杏村の「思想家」としての資性に欠ける点があったことも確かであろう。
- 61 左右田『左右田喜一郎論文集 第二巻 文化価値と極限概念』、63頁。
- 62 同上、64頁。
- 63 大木前掲論文を参照。
- 64 この点、前掲の船山『日本の観念論者』では、「桑木はカント哲学を中心とした代表的な哲学啓蒙家であり、また啓蒙活動を文化的に最も活発に行った哲学者であった」（『船山信一著作集』第八巻、159頁）と評価されている。
- 65 野村隈畔もまた、左右田の「論文は決して読み易い文章ではない」と認めており、その「難解」さを指摘した。野村前掲書、173頁。
- 66 蠟山前掲書、157頁。
- 67 同上、同頁。
- 68 生松敬三『現代日本思想史 4 大正期の思想と文化』青木書店、1971年、79～83頁。
- 69 『横浜社会館事業概要』第1輯、社団法人神奈川県済会横浜社会館、1925年、20頁。なお横浜社会館設立の評議員には、左右田のほか労働運動家の鈴木文治らも名を連ねた。同館の主な事業は労働者の簡易宿泊所であったが、宿泊者の職業や生活状況、思想傾向に至るまで調査し記録を残している。関東大震災の際には同館も被災したものの、被災者の救援活動に乗り出し、1日4千人以上に炊き出しを行ったという。
- 70 左右田の死をもって、『『文化主義』の終末をシンボリックに示しているもの』と捉える見解もある。生松前掲書、97頁。
- 71 ヘーゲル哲学の発展のほか、自然科学思潮やマルクスの唯物史観、さらにビスマルクの軍国主義的政策などの影響により勢力を得た「国家主義」を背景とするドイツ「文化国家」の概念については、朝永三十郎『独逸思想と其背景』（東京宝文館、1916年、114頁）、徳富猪一郎監修・吉野作造編輯『現代叢書 独逸軍国主義』（民友社、1916年、99～100頁）などに詳しい。
- 72 第一次世界大戦後、平和思想を含む「文化国家」論をいち早く提起したのは、桑木巖翼であった（大木前掲論文）。一方、左右田の文化主義思想についても、「明治期以来の日本の近代化のための富国強兵策にもとづく文明開化政策に対する批判としての文化国家を

展開する理想が見られた」との評価もあるが、それは当時の日本の状況から乖離した、「あまりにも理想に傾いたものであった」とされる。濱田侑子『入門 近代日本思想史』筑摩書房、2013年、136頁。

⁷³ この点、たとえば生松前掲書では、「左右田の『文化主義』を批判的に継受して、同じく新カント学派の文化哲学、価値哲学の立場から精力的にマルクス主義批判を展開し、パウル・ナトルプ流の『理想主義的社會主義論』を旺盛な文筆活動によって鼓吹した土田杏村」(96頁)との記述がある。